

『森林の少年』（七）

D・H・ロレンス & M・L・スキナー

山田晶子 訳

る。

居間から真直ぐに裏のヴェランダへ出られ、そこには四本の木と、囲われた庭が一つといくつかの裏庭があった。庭には色鮮やかな花々が咲いていた。エリスさんがそれらを好んだからであった。また石造りの丸い井戸があった。隣に裏庭があったが、四本の木によつて四角く形作られていた。台所のドアの片側には桑の木が立ち、もう一方の側にはコショウの木が立ち、少し離れた所にはトベラの木があつて下には椅子があつた。そして向い側にはノーフォーク島松の木と不完全な樅の木が立っていた。

トムはジャックに家族のことをよく話した。ひどくこんぐらかつていると二人は思った。おばあちゃんはなんと歳とつているのだらうか！ いったい幾つなんだ！ お父ちゃんは五十歳で、叔父さんのエアス（もう亡くなつたのだが）とは双児であつた。

彼はまた醜い石造りの家を、特に影になつた南側の部分を気に入つていたが、そこは家の裏側でハッカの木が立つていた。正面玄関を入ると——誰もそうはしなかつたが——小さな通路があつて、一方の側は客間に、もう一方は死ぬための部屋にながつていた。トムがなぜ「死ぬための部屋」と呼んだかと言えば、家族がそれを他の目的のためには使用したことがなかつたからである。老エリスさんはそこへ運ばれて死んだ。彼の兄弟のウィリーもそうだった。トムが説明するには「階段が狭すぎて柩を運べない」ということであつた。

通路を通つて段を一段降りると居間があつた。ここから右手へ段を一段上がると台所へ入つた。そして左手では一段上がつた所におばあちゃんの部屋があつた。昔はおばあちゃんの部屋が、家全体であつた。他の部屋は建て増しされたのであつた。これはオーストラリアではしばしば行なわれていることであ

おばあちゃんの息子はこの二人だけであつた。しかしながら、彼女には七人の娘がいた。そしてジャックはおばあちゃんには何百人もの孫がいるように思つた。彼らのたいいはいはもう成人しており、更に多くの子供が出来ていたと思われた。

「子供たち全部の名前を覚えるなんて不可能だつたよ。」
と、トムは断言した。

「覚えようとしたことはなかつたけど。おばあちゃんも覚えようとはしなかつた。おばあちゃんは孫のことなんかちつとも気にかけていなかったんだ——父ちゃんと僕たちのこと以外は気にかけていなかったんだ。」

おばあちゃんは白いレースのキャップを冠り、白い巻き毛を持ち象牙色の顔をした繊細な老婦人であつた。彼女は、あたかも家族を統括している神のようにジャックには思われ、深く感銘を与えた。彼女が居間の炉端に座つた時はその頭上で古めかしい時計がチツクタツク鳴つていた。この時計もジャックを感動させた。彼女の年齢と青白さと白髪と白いキャップと距離感には、何か気味悪さがあつた。彼女はこの家では非常に重要な存在であつたが、大抵姿が見えなかつた。

レニー、ケイティ、オグとマグ、ハリー、絹綿髪をしたエリー、そして赤ん坊。これらが「子供たち」として教えられていた。トムは、母ちゃんとは違う母親の子供であつたので、「子供たち」の内には入つていなかった。そして更に別の双児であるモニカとグレースが間もなくやつてこようとしていた。これ

らは小羊たちであつた。ジャックは熱情的にこの家族を愛しており、なんらかの仕事をそこですることが幸せて座つて袋を繕いながら、自分は羊の格好をした狼であると思ひ、ひそかに笑つた。

彼は、なぜハリーを好きになれないのか、と考へた。ハリーは六歳でかなり太つておりハンサムで、雄牛の仔のように強かつた。だが彼はいつも赤ん坊を苛めていた。あるいは赤ん坊がハリーを苛めているのだろうか？

ハリーは絵本を持つており、文字を探していた。そこへ赤ん坊が這い上がつてきて本の上に倒れた。ハリーは本をひつたくつた。赤ん坊は叫び始めた。母ちゃんが調停を始めた。

「赤ちゃんに本をおやり。」

「母ちゃん、だけどこいつは破いてしまふよ。」

「あんたには新しいのを買つてあげるから。おやり！」

「いつ買つてくれるの？」

「いつかね、ハリー。パースへ出かけた時に。」

「そう——いつか！月曜日に買つてくれない？」

「ハリー——！どうか静かにして。お願いだから——」

それで赤ん坊とハリーは叫びながら争つているうちに本を引き裂いてしまった。そうこうするうちにハリーは表紙で赤ん坊の頭をバンバン叩いた。そして熱した、危険な苛めつ子の表情が彼の目に浮かんで来た。苛めつ子の表情であつた。ジャックはそれをすでに知つていた。オーストラリアでそれを知る前

に、もつとよく知っていた。

しかしそれでも赤ん坊はハリーを崇めていた。彼は彼女の唯一の神であった。

ジャックは、この赤ん坊にいつも驚嘆していた。彼には彼女は怪物に思われた。まだ生まれて十二ヶ月も経っていないかった。しかし神は彼女が知っていることをなんでも知っていた。赤い唇を鳴らし、歯のない口で甘い水気の多い食物を食べる時のエクスタシーを。邪魔されたら悪魔的な金切り声を上げることを。ポタージュから固まりを吐き出す方法を。いったい、この歳でどうして、ポタージュの中の固まりをそんなにも憎悪するようになったのか！ ひまし油を飲ませられる時に鼻をつまむ姿を。そして、赤ん坊はポタージュの固まりに荒々しく抵抗したけれども、しつこいや土や、バケツに入っている豚用の残飯などの不快な物をどんなに好んだことか。

赤ん坊がゴミを口に押し込もうとしているのを見つけて叱ると、両手をきれいにしておうとしてばんざいをするのであった。そしてぼろ布でその口を拭つてやつても全然気にかけなかった。

赤ん坊は女の子であった。だから新しい清潔な服を着たがった。新しいかっこいい服を着ると、とても満足してゴロゴロ言い、お腹を叩いた。全く驚くべき存在であった！

赤ん坊は雄牛や種馬や大きな豚が大好きで、それらの脚の間を駆けずり回った。しかしながら、鳥や犬がそばへ来るととて

つもない恐怖の叫び声を挙げた。人懐っこい老犬や、足元へ突つきにくるおとなしい雌鳥には身震いするのであった。

赤ん坊は馬がいる既へ、いつも急いで行こうとしていた。そして火の中へ手を入れようとする大馬鹿な願望を持っていた。そして赤ん坊は青い目をしているハリーを崇拜していた。また彼女のために身をすり減らしている母親を全然気にかけなかった。ハリーは、彼女を軽蔑し憎悪して、つねり殴り、お気に入り場所から突き出した——芝生の一角から、炉端の敷物から、ソファの端から。しかし彼女はしつぱいがえしをできるまことにその瞬間を知っていた。彼の頭からキャップを爪でつかみ、彼の金髪をつかんだり、或いはジャム付きパンを床へ投げ出した。できればゴミの中へ……。

ジャックには、彼女は全く信じられない存在であった。

2

だがこれはこの家族の一側面に過ぎなかったので、彼は家族を愛した。

彼は、生意気なレンがたまらなく好きであった。

「なぜお顔を洗いたいんだい？ なぜ他のやつらと同じように『つら』と言えないんだ？ それにお手々を洗う前になぜお顔を洗うんだね？」

「顔を洗うのにきれいな水が必要だからさ。」

「お顔をなでつけるお手々はどうするんだ？」

「フランネルかスポンジを使えばいいさ。」

「もし手にはいれればな。ブッシュには生えていないぜ。俺にも、今、くれないか。仲良くしようぜ。あんたはキャンプに行ったら、どうしようもないあほうになるよ。恥をかくぜ。先ず、手を洗わなきゃ。十分水があれば半分づつ使えばいいさ。だが水は足りないんだ。だから手をせっけんのだらけにして顔をなでるんだ。猫のようになで回すんじゃない。上下に洗うんだ。次に顔を井戸のポンプの下で流して乾かせばいい。決してタオルを無駄に使うな。ほかのことに必要だからな。」

「ほかのことって何だい？」

「肉やパンなどを包むのに必要さ。或いはアリがつかないように食事をするときに敷くのに必要なんだ。」

その時トムが割って入った。

「おい！ 知ったかぶりの小僧！ 黙れ！ 俺がでしゃばるなと言っただろう？ お前なんか口を出さなくても俺がジャック・グラントに教えてやれるよ、とつとあつちへ行け！」

「できればいいがな。」

レンは慌てて逃げ出しながら憎まれ口を叩いた。

トムが一族の長であった。それで他の者は、厚かましい忠誠の払い方だとしても、彼に対しては忠実に心から従った。

「何て変な奴なんだ！」

と、ジャックは言った。

「あいつは家族の他の者とは違っているね。それに訳が分か

らないチンプンカンプンなことを言うしき。」

「同じき！ ったくおんなじき。俺たちみんなとおんなじき。ここらへんのガキどもと変わらないさ。奴は、モニカ、グレースそして俺と同じように、開拓地にある叔母さんが経営する学校へ行つたんだ。ラケット先生が来るまでは。もし何か違った所があるなら、先生からもらったんだよ。先生はイギリス人だから。」

ジャックは、いつもみんなが、ラケット先生のことを、飼いや馴らしているガラガラ蛇の種であるかのごとく語ることに気がついた。

「だけど母ちゃんは、父ちゃんに頼んで先生を見つけてもらったんだ——家で授業を受けさせるために。なぜかと言えば、母ちゃんはレンと一日たりとも離れていることに耐えられないからだ。彼は、多分、母ちゃんの長男だと思うよ。先生は仕事なんかいらぬんだ。金持ちだからね。だけどここにいる時は教えることが好きなんだ。先生がここにいない時はレニーは怠けて好きな本を読んでいる。だけど問題ない。レンは本当に頭がいいからね。そして——」

トムはにやにや笑いながら付け加えた——

「やつは、あんたが喋るようには絶対に喋らないし。」

イギリスのパブリックスクールから出て来たばかりのジャックには、レンは度胆を抜かれる存在であった。ひどく怪我をしたなら、彼は数分間座って泣いた。岩が打たれたかのように涙

がどつと溢れ出た。もし悲しい詩を読んだなら、彼は座つて泣き、誰をも気にしないで腕で目を拭いた。彼は大食らいで、大人を前にしていようと食べたい時には食べただけ食べた。しかも誰もそれを気になかなかつた。彼は気取つて、詩すなわちラテン語の断片をこの上なくひどいアクセントで、良心の呵責を感じないで喋つた。自分がすることは何でも正しいことであると彼の目には映つていた。彼自身の目にとつては完璧に正しいことであつた。

彼の母親は彼に魅了されていた。

三つの事柄を彼は上手にやれた。裸の馬の背に立つたまま乗り、また横たわつた。サーカスの人間のように馬に乗つたのだ。またほらを吹いた——天国へ届く程に。三番目に、彼は笑うことができた。彼が笑う時、非常に突然で、陽気で、生意気で、大胆で、懐かし気な何かがその明るい顔にはあつたので、見る者の心は一滴の水のように溶けてしまつた。

ジャックは彼を情熱的に愛していた。家族の一人として。

しかしながら、レニーにとつてはトムは英雄であつた。トム、鈍いトム、かなり愚かなトムが。レニーにとつては、トムのまさにその愚かしさこそが男らしかつたのだ。トムはとても頼りがいがあつて、とても男らしくて、非常に有能な指揮官であつた。彼は決して誰にも迷惑をかけなかつた。非常に満足しており、自信を持つていた。レニーは私生児で妖精であつた。しかしトムは善良な普通の男であり、それゆえに英雄であつた。

ジャックは、トムも愛していた。しかし彼はトムの男らしさをそれほど絶対的に受け入れなかつた。そして、不思議な感受性が強いレンが、善良な平凡な男に自らを絶対的に従わせ自分を第二位の位置に置いていたことに、ジャックは少し傷ついた。だが事実はそうであつた。トムはかしらだつた。ジャックにとつてさえも。

3

トムが留守の時、ジャックはあたかも全ての中心点が失われているかのように感じた。エリスのおかみさんは本物の中心点ではなかつた。それは地味な赤ら顔のトムであつた。

トムはとぎれとぎれにジャックにいろいろと話してくれていた。いつものことながら退屈であつたのは家族であつた。彼は家族について話してくれた。

「俺のお爺ちゃんは、早い時期にここへやつて来たんだ。おじいちゃんは商人で、東インド会社事業からみの件で金を全部スつてしまつたんだ。メルボルンでおばあちゃんと結婚して、その後でここへやつて来たんだ。二人は少しは苦勞をしたが目目を遂げることができた。それからおじいちゃんは遺書を残さないうで死んでしまつたんだ。で、おばあちゃんにとつては厄介なことになつたんだ。父ちゃんとエアスは双児だつたんだが、父ちゃんの方が兄だつた。だけど父ちゃんは家を出て行つてしまつたんだ。何年もどこかへ行つてしまつていて、誰も父ちゃ

んがいつも何をしていたのか知らない。」

「だけどおばあちゃんは父ちゃんが一番好きで、父ちゃんは兄さんだった。だからおばあちゃんは、とうちゃんが戻って来た時、ここを全部父ちゃんの物にするように整えたんだ。おばあちゃんは、レッドをここから追い出すのに物凄く苦労したんだ。叔母さんたちはみんなレッドの味方だった。俺たちは、エアスの一家をいつもレッドと呼んでいる。そしてエミー叔母さんは、父ちゃんではなくて、エ阿斯叔父さんが最初に産まれたと信じていると言っている。そしておばあちゃんは、最初から父ちゃんを贖っていたので、父ちゃんが兄になつてると言っているのだ。どのみち取るに足らないことなんだけど。俺は絶対に双児の親になりたくないよ。家をかき回すからな。一番やつかいなことだ。エ阿斯一家には双児はいないけどさ。息子ばかり七人いて、娘は一人もない。そして双児はいない。エ阿斯叔父さんは亡くなった。それで息子がその家を守っている。」

「エ阿斯叔父さんとはかくいやなけちな奴だった。彼は召し使いの女と結婚した。皆は、召し使いの女は召し使いの女に過ぎないと言っているよ。」

「彼も遺書を作らなかつたんだ。遺書がないと双児と同じように家をかき回されるよ。父ちゃんも遺書を作らないよ。父ちゃんの父ちゃんがどうしても遺書を作らなかつたんだ。だから父ちゃんは遺書を作らないんだ。」

つまりこれは、植民地の法律に従って、財産はトムの物になるだろうということであるとジャックには分かった。

「おばあちゃんのやり方は結構なものだった！彼女は決して自分のことを噂させなかつたが、レッドを追い出したんだ。彼女は株を貯えた。いつも株を持つていた。そして土地を買ったんだ。彼女は向うの土地がここよりも良いと言って、レッドを説き伏せたんだ。そして彼らのために向うの場所に立っている納屋を買ってやつたんだ。そして彼らをそこへ追い出したんだ。誰か気掛かりな者がいる時、彼女は巧みなやり方をするんだ。今、おばあちゃんの気掛かりはレンだよ。」

「とにかく、父ちゃんが帰って来た時、『ワンドゥー』は彼のためにすっかり用意されていた。父ちゃんは俺を毛布にくるんで連れて来た。混血児の爺さんのチームが召し使いだつた。他に年老いた俺の乳母がいた。これだけしか自分のことは知らない。自分が誰なのか、母親が誰なのかも。父ちゃんは絶対に話してくれないんだ。」

「彼は小金を持って帰って来た。それでおばあちゃんは俺の世話をするようにと、父ちゃんと母ちゃんを結婚させたんだ。おばあちゃんは、俺が泣きわめく小さなぎたならしいガキだつたと言っているよ。それできちんとした子供に育て上げられることを望んでいた。だから母ちゃんは実行した。だけどおばあちゃんは、ちつとも俺を気に入ってくれなかつたんだ。」

「俺がどのようにここへ来たかを考えれば、こんなにも安定

して普通であるのは、そしてレンが非常に賢くて不安定なのは
おかしなことだ。俺がレンで、レンが俺であつてもいい、とあ
んたには思えるだろう。」

「俺の母親は誰であつたのか？それが知りたいんだ。彼女は
誰だつたのか？父ちゃんは絶対に言おうとしない。」

「とにかく彼女は黒人ではなかつたんだね。だつたらどのみ
ち問題はないんじゃないか？」

「だけど問題なんだ！」

トムは、拳固でもう一方の手のひらをパシッと打つた。

「どんな子供も母親にとつては普通の人間ではない。俺は誰
にとつても普通に見えるんだ。だから普通じゃないと思つてく
れる人が欲しい。」

変なことを言うトムだ。誰もが彼に頼つているから、彼はこ
の場所では英雄であつたのだ。彼はとても安定していて普通に
頼りがいがあつたから。それなのに今、彼でさえも自分が別の
人間であれば良いのにと願つていた。人が自分をどのようにな
考えているかは他人には決して分からないものだ。

4

レッド一族に関して言えば、ジャックは一度か二度そこへ
行つたことがあつた。彼らは荒つぽい人間であつた。父親も母
親も死んでいた。独身男たちの所帯であつた。何か余分な仕事
がある時は、ワンドゥー家の者達が手伝いに出かけた。また

レッド一家も同じようにワンドゥーへ来た。実際には、エリス
一家よりも彼らの方がたびたびワンドゥーへ来た。

ジャックは、レッド一族は彼を好きではないと感じていた。
だから彼も彼らが好きではなかつた。長男のレッド・エリスは
およそ三十歳位で、背が高く遅く、赤毛と赤ヒゲの赤ら顔
の男で、じつと見つめる青い目をしていた。ある朝、トムとエ
リスさんが羊を集め点検をするために出かけていた時、ジャッ
クはレッド家へ行くことになった。これはジャックがワン
ドゥーへ来て二週間の間のことだつた。

長男のレッドが中庭で彼と会つた。

「お前の馬つ子はどこだ。」

「持つてないよ。エリスさんが、あんたが貸してくれると言っ
たんだ。」

「乗れるんか？」

「多少は。」

「ここで馬に乗るのにハイドパーク用の服を着たいんか？」

「乗馬用に、ほかに着る物を持っていないんだ。」

ジャックは、古い乗馬ズボンを履いていた。

「ズボンを履いては馬に乗れんが。」

「でも膝の上までたくしあげておけないんだ。」

「まあ、しかたがないか。頭を使って動き易くしておけ。ズ
ボンの裾を降ろして靴下を揚げておけ。それじゃ、来い！馬
を見せてやろう。」

二人は放し飼いの場へ行った。物凄く広かった。しかし二、三人の黒人少年が荒々しい感じの葦毛を引いている以外には、今やからつぼの砂漠であった。レッドはその一人に呼び掛けた。

「スタン・ピードを捕まえたんだな。それじゃ首の骨を折られる前にそれを放せ。お前にはそれに乗れない。分かるか？ ネット、既にはどんなのがいるんだ。」

「あなたの雌馬です、旦那。あなたを待っています。」

「他にはどんなのを捕まえたんだ、にやにや笑いめ！ このグラントさんのために何かを見つけろ。すばしこくやれ！」

「旦那さん、どんな馬も入って来ません。よその人が来るなんて知りませんでした。」

レッドはジャックを見た。エースは粗野な、目がクルクル回る、体に締めまりがない背が高い男であった。

「聞いたか？ この既にいるのはスタン・ピードだけだ。奴を連れて行け。恐かったら手を出すな。俺は羊の点検に行く。もう行くからな。あんたが一日中ここでぶらぶらしていても、俺のせいじゃないからな。」

ジャックは躊躇していた。植民地の視点から言えば彼は乗馬が下手であった。自分でも分かっていた。だが彼はエースの侮蔑的な態度に反感を抱いていた。エースは自らに満足して、雌馬を連れに既へ行った。彼は若いジャックルーがここへやって来て、下らないことを言われることが嫌であった。

ジャックは、震えているスタン・ピードの所までゆつくりと

行った。

レッド・エースが草を噛みながら既から出て来た。

「鞍を付けて。乗ってみよう。」

ジャックは黒人たちに言った。

少年たちはにやつと笑ってばたばた仕事をした。彼らはこの仕事がとて好きだった。素早く軽やかにジャックは鞍に乗って脚を固定した。少年達は後へ下った。馬は後ろ脚で立ち上がった、グルグル回った。そして中庭を爆竹のようにぐるぐる回って飛んで行った。少年達はバラバラ散った。エースもそうであった。しかしジャックは、当然のことながら、脚で締め付けて馬にしがみついていた。骨がガタガタ鳴った。帽子は払われた。心臓が大きく鳴り、打っていた。だが馬が彼を乗せたまま後ろ向きに倒れない限り、彼は乗っていることが出来た。そして全く恐れていなかった。彼は思った。『馬が後ろへ倒れなければ自分は大丈夫だ。』そして少年たちに呼び掛けた。

「門を開けろ。」

その間、彼は馬を静めようとした。

「じつとしろ！ さあ、じつとしろ！」

彼は優しく愛情を込めた声で言った。

そしていつも、鉄のような腿と膝で馬を締めつけていた。

彼は、馬が悪意を秘めているとは信じていなかった。人間を除いては、どんなものにも悪意が存在するとは信じていなかった。そして単に支配したいという欲望だけで馬と戦いたくはな

かった。馬が少し落ち着くまで両脚でしつかりと締めつけていた。ただただだけであった。彼と馬は、ある合意点に達していた。だが脚を緩めることはしてはならなかった。さもないと死んでしまうから。

スタンピードは、門へ出る準備が出来ていなかった。門が火で守られているかのように獐猛に門を目掛けて突進した。いったん戸外へ出るや、彼は走った。乗り手を振り落とそうとした。そして走り、蹴り、振り落とそうとし、走った。ジャックは万力のように下半身で締め付けた。頭が肩からもぎ取られるような気がした。困難な仕事になっていた。だがしがみついていた。なければ死んでしまうであろう。

それから、ジャックはスタンピードが逃げ出そうとしていることに気がついた。エアスが灰色の雌馬に乗ってやって来た。

さてジャックは遠い方の門に辿り着いた。すると奇跡が生じたのだ。レッドがやって来て門を開ける間、スタンピードはじつと立っていたのだ。ジャックは、両脚の間に、生きた筋肉と震える火の体を意識していた。熱い鉄線のような髪を振り上げる獐猛な頭を、そして僅かの白い泡を意識していた。また自身の腿の震えと両脚の力の中に熱い荒々しい体をつかむという官能性に気がついていて、不思議な震えを覚えさせる官能的な支配力の中に馬を捕らえているということ。しかしながら彼は敢えて力を抜こうとしなかった。

「行けっ！」

レッドが叫んだ。ジャックと馬は飛び出した。スタンピードは風のごとくに跳ねた。ジャックは膝で挟んでバランスを保っていた。全くぞくぞくしていた。外目には怖がっているように見えたが、内心ではわくわくしていた。そして一瞬たりとも気を緩めなかったし、体が振り上げられても力を緩めなかった。最悪のことは、振り落とそうとして馬がら旋状に回ることであった。その場合には彼は獣の頭部にまで跳ね上げられる程であった。憎悪で膨れ上がった時には、この獣を殺したいと思つたし、敗北するよりは一千回も殺された方がましであった。前方へ押し出され、鞍から離れ、バラバラになる程までにずり落ちた。彼がバランスを保てたことは自分にとつてさえも神秘に思われた。彼の体は、下にある獐猛な生命の爆発によってそんなにまで振り回されたのであった。彼は粉々になると感じた。骨が関節からはずれてがたがた鳴っているかのようにであった。だが彼らは羊の囲い場所まで辿り着いた。そこでは一群のレッドたちと黒人の少年たちが黙ってじつと見つめていた。

ジャックは馬から飛び下りた。膝はがくがくし両手は震えていた。馬は汗を流しながら黒つぽく立っていた。素早く彼は鞍と轡を緩めはずした。そして馬の首を軽く叩いた。馬はまた自由になり駆け去った。

ジャックはレッドたちを、それからエアスを一瞥した。レッド・エサウも彼の目を見た。二人は互いに見つめあった。それ

は、古い国の古い支配に反抗する野蛮で退化的な敵意に満ちた植民者の挑戦であった。ジャックはかろうじて意識していただけであった。しかしながら、彼は内心では、クルクル回る目をした野獣のような男を恐れていなかった。エースは彼よりも大きく年上で地歩が固まっていたが、彼とどつちこつちの男であった。だがジャックは背後に、豊かな文化を持つ故国の誇りを持つていた。彼は育ちにおいては負けないであろう。植民地の暮し方つまり野蛮さと平凡さに自分の男らしさを屈服させるつもりはなかった。内心では絶対にそれに負けないであろう。だが植民地の最高のもの、正直さと素朴さを彼は愛していた。だがもう一方の面を彼は拒否し反抗した。

これらの決意は意識的なものではなかったが、十八歳の少年の魂においては重大なことであった。そして国民の運命は、このような暗黙でほとんど無意識の決意に掛かっているのである。

エサウ——みんなは彼をエースと呼んでいたが、名前はエサウであった——は、黒人に向かって吠えた。

「熟練者に馬を与えろ。そのいまましい鞍を家へ持つて行け。」

それから黙々と彼らみんなは羊を点検しに出かけた。(続)